

# 全 仏

NO. 243

10・11 / 53

(合併号)



21世紀における仏陀のメッセージ。を大会テーマに、世界各国の仏教徒が一堂に会し第12回世界仏教徒会議日本大会が開催され、今日の世界状況のなかで様々な問題について意欲あふれる討議を行う一方、歓迎会も度々開かれ、仏教徒の交歓親善も輪を広げるなど大会は盛会裡に終了した。

なお、次期(第13回大会)開催国はタイ国と発表され、代表団は2年後の再会を誓って各々帰国の途についた。

# 第12回 世界仏教徒会議日本大会開く

## 23か国参加史上最大の大会

第十二回世界仏教徒会議（WFB）日本大会は、二十一世紀における仏陀のメッセージをテーマに、十月一日より六日まで東京・京都において開催され、十二日まで地方大会が各地で行なわれた。WFB大会は二年に一度、世界の仏教徒が一堂に会し、様々な問題を語り合うものであるが、日本では昭和二十七年に第二回大会を開催して以来、実に二十五年ぶりのことであったが、海外より二十三国・四十八センチター、四百名の代表やオブザーバーが参加する、大会史上最大の大会となった。

### 地方大会ふくめて12日間

九月二十七日、大会事務局を東京グランドホテルに移動し、二十八日からは登録が開始され、二十九日の深夜遅くまで戦場のような忙がしきであり、三十日にはセンチター代表者によるWFB総会が開かれた。

晴天に恵まれた十月一日、いよいよ大会の幕があげられ、開会式が行なわれる。築地本願寺は民族色豊かな代表団や国内参加で満堂となり、ブーンWFB会長、大光真大会会長（全仏会長）の挨拶や土産品の贈呈など賑やかに展開された。

午後は増上寺に移り、基調講演（中村元博士）と三分科会が行なわれ、分科会では冒頭より白熱した議論がなされた。

夜は東京都仏教連合会の主催する歓迎レセプションが、ホテルオオタニで開かれ大会第一日目を終了した。

一方、第三回世界仏教青年会議（WFBY）も三時より、増上寺大講堂において開会式、総会を開き、若い活発な討議がなされた。

十月二日は分科会、パネルディスカッションが行なわれ、WFBYも全日仏青年が五百人以上を集めて青年結集を盛大に開催、全日仏婦人部会と連盟二十五回大会を併修し大盛会で、熱気に満ちていた。

夜は会長招宴が白金地蔵館で、一千名を越える人々が招かれ、福田首相も出席

するなど盛会で、庭園において伝統芸能を楽しんだり、日本の味に舌つづみをつうじた。

三日目は代表団によるWFB常設委員会が開かれ、財政・人道・布教など六つの委員会に分れて熱心な討議がつづけられた。この日は読売ホールにおいて記念講演会も開かれ一般の参加も予想を上まわるほどであった。夕方からは国立劇場において歓迎大会がもたれ、式典と観劇があった。

四日目は忙がしい会議を忘れて、汗ばむほどの好天のなか、よみうりランドに赴き、仏舍利記念法要のあと散策し秋の一日を満喫した。

五日目は増上寺にて全体会議と世界平和祈願法要が行なわれ、タライ・ラマ殿下も参加され注目された。このあと新幹線にて京都に入った。

十月六日、代表団は三班に分れて京都市内各山を参拝。夕方より京都国際会議場において閉会式が行なわれ、次期開催のタイ国代表に大会旗が渡され、同所にて京都府仏教会主催のサヨナラパーティーが楽しく行なわれ、本大会を盛會裡に終了した。

十月七日からは地方大会が各地において開催された。七日は京都妙心寺大会、広島大会、四国鳴門大会、鴨江寺大会が



築地本願寺での開会式

行なわれ、各地で盛大な歓迎会がもたれた。  
八日は高野山金剛峯寺大会、九日は比叡山延暦寺大会、神奈川大会、十日は塩

# 秋晴れの開会式 ……築地本願寺……

抜けるような秋晴れの空。開会式の行なわれる築地本願寺には、笑顔の参加者が続々とつめかけ、代表団もバスにて到着し、黄衣の比丘、民族衣裳の代表団が

釜・東園寺大会、十一日は新潟長岡大会と埼玉川越大会が開かれ仏教親善交歓会が行なわれ、それぞれの地区での心からなる歓待に感謝し帰国の途についた。

目をひく。仲田順和師(式典委員長)の司会で開会し、開会式場の本堂に内外来賓が着席。ついで比丘団が入堂して外陣に着席。伊藤完夫先生のパイオルガン

演奏と合唱団の歌声にあわせ、ボーイスカウトのもつプラカードを先頭に代表団がセンターごとに入場し、満場の拍手に迎えられる。  
築地本願寺・芝原郷音輪番の導師により仏教徒追悼法要が厳粛裡に営まれたあと、大会旗掲揚、川田聖賢全仏副会長

の三篇依文導唱とつづく。  
次に、WFBブリン・ピスマイデイスタル会長が「この大会を興りある大会にしてほしい」と、お元気に開会の宣言を行ない、ついで大谷光真大会会長(全仏

## 大会宣言

世界の仏教徒を代表する世界仏教徒連盟(WFB)のメンバーは、ここに全日本仏教会の支援のもとに第十二回大会を東京および京都において、仏紀

と自己犠牲の柔軟なる精神が世界をおおい、人間および、すべてのいきとしけるものに平和と幸福をもたらすように努力する。  
われらは、WFBの組織を開拓したる人々の心中の信仰を、ここにあらためて確認する。すなわち、これらの人々は地理的かつ伝統的に、多くの距離

### 平和と調和の実践など四項目

二五三年(一九七八年)十月一日より六日にわたって挙行し仏紀二四九四年(一九五〇年六月六日)スリランカにおいて挙行せられたるWFB第一回創立大会において発表せられた憲章前文の精神を支持することを主張し、確認するものである。すなわち、仏陀の深遠なる教義を知らしむべく、われらの全力をつくして精進し、よって華仕

と世紀を隔てたる多数の仏教徒の間における相互理解と協力を自覚せる人々であった。われらは、東西半球の仏教徒の間に共通の結束が成長しつつあることを深く喜びとするものである。今や、より大にして密接なる交流の機会によって、仏教徒は地球的平和の目標と人類の精神的福祉に向って重要な寄与をなしているものである。

以上の前文に則り、かつ現在の世界の状況に鑑みてわれらはここに厳粛に以下のことを宣言する。  
①われらは、われらの一致と団結と友愛の心を妨げるいかなる障害も乗り越えることを決意する。  
②われらは世界共同体を達成すべしという最終目的に沿い、平和と調和に向って実践すべく、世界における他の宗教的人道的組織とも共同して努力する。

③われらは、より若き世代の福利のために、いまだ手をつけられていない宗教的ならびに教育的素材を探求するものである。  
④われらは、シャカムニ仏の生誕地ルンビニーの完全なる復元を主張するものである。  
一九七八年十月六日

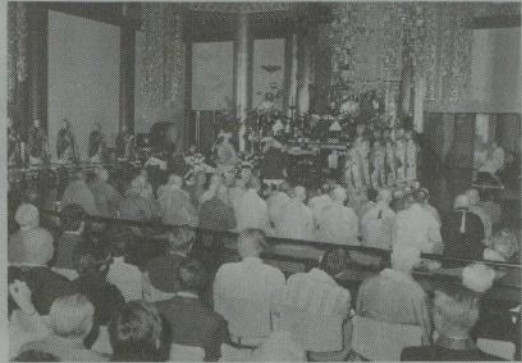
会長)が「スリランカで第一回大会が開かれて以来二十八年の歳月が流れ、この間に科学技術の発展は、人類の未来に色々な問題をあたえております。これらの問題を考えますと、仏教徒の責務は大きなものがあります。今大会の使命は大きく、熱心に討議されまして意義ある大会となりますよう念願します」と式辞を述べ、町田宗夫全仏理事長が歓迎の辞を述べた。

次に来賓の保利茂衆議院議長、安井謙参議院議長、船田中自民党副総裁、庭野日敬WCRP委員長、藤田康雄日本宗教連盟理事長より祝辞があり、それぞれ今大会の成果を期待すると述べられた。  
このあと、大会協力者代表へ感謝状の贈呈があり、ブリン会長より北海道の両瀬正男師に感謝状が手渡された。

メッセージの披露は、タイ国王、スリランカ大統領、同首相、アメリカ大統領、ネパール首相のものが、各国駐日大使等によって代読された。  
参加各センターよりの土産品贈呈は一転して賑やかなムードになり、ブラジルより大きな鎌の額、東南アジアのセンターからは仏像などたくさん土産品が大谷会長に渡され、満堂八百名以上の参加者から大きな拍手がおこり、和やかな風景を展開した。

最後に齋藤正浩全仏事務総長が閉会の辞を述べ、盛会裡に開会式を終了した。

増上寺での平和祈願法要



開会式の比丘団席

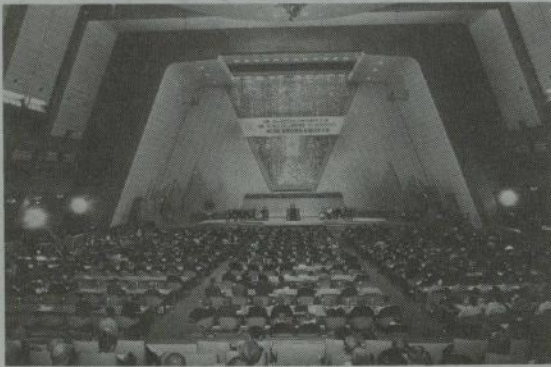


## 国立劇場で 観迎大会

国立劇場における歓迎大会は、三日午後四時ピッタリに緞帳が上がり、真暗闇の中に、仏陀の光明のごとくスポットが法輪を照らします。

坂本観晃師(式典副委員長)の司会により、鱗淵正浩全仏事務総長の開会の言葉、大谷光貞全仏会長の三層依文について、桜井大乗実行委員長が「本大会に遠路ご参加されました代表の皆さまを、多くの日本仏教徒とともに、心からお迎

京都国際会議場での開会式



えいたします」と歓迎の言葉を述べた。次に各センターの紹介にうつり、WFB副会長、特別ゲスト、本部役員が紹介されたあと、各センター代表団の紹介は国際色豊かに賑やかに行なわれ、紹介されたセンターが立って会釈すること大きな拍手がおこり、特に一人で参加して

## ダライ・ラマ親下出席

世界平和  
祈願法要

世界平和祈願法要は、ダライ・ラマ親下の出席により、多数の報道関係者がつめかけ一時騒然としたが、法鼓が鳴り比丘団が入堂すると厳肅な空気がみなぎった。喚鐘で増上寺・藤井実心法主が入堂し、中村式典部長の司会で始まった。

まず藤井法主の導師で法要が執行され明徳幼稚園児三十名の稚児献花があり、藤井法主の垂示があつて日本の法要を終了した。

## 次期開催はタイ国

京都国際会議  
場の開会式

古都の静けさそのままの宝ヶ池にある京都国際会議場において、午後四時より関西地区参加者の迎える中で開会式がおこなわれた。

吉田啓堂師(式典副委員長)の司会により、各センター代表団が、大阪・清風学園生徒の先導で、手を振りながら笑顔で次々と入場し、最初から和らいだ開会式となった。

町田宗夫全仏理事長の開会の辞、山田無文全仏副会長と妙心寺雲水による三層

いるところには、より温かい歓迎の拍手がおくられるなど、式典が盛り上った。閉会の言葉を安藤義祐全仏事務次長が述べたあと、水谷八重子主演の新派「女人哀詞」一唐人お吉ものがたりを観劇した。

つづいて比丘団の法要にうつり、まず上座部(南方)を代表してチャンダナンダ大僧正を導師にティーサラナが行なわれ、次に大乗仏教(北方)を代表してダライ・ラマ親下を導師にハートウトラが行なわれた。

比丘団が施食供養のための退堂のあと、安本利正全仏国際文化局長が開会の辞を行ない、世界平和祈願法要をおえた。

依文、大谷光貞大会会長の挨拶、スナオミヤバラ氏(ハワイ)の議長団代表の挨拶とつづく。

次に真溪義貫大会実行副委員長より分科会、パネルディスカッションの報告があったあと、桜井大乗大会実行委員長が「世界仏教徒会議日本大会宣言」を読みあげ、拍手をもって採択された。(会議報告、宣言別掲)

次にルンビニ復興基金目録が鱗淵正浩全仏事務総長より、ネパールのロック・



会長招宴でお迎える大谷会長

ダルシヤン代表に贈呈、また大会に参加した海外代表全員に、京の舞扇が記念として贈られ、大谷会長よりフランス神センターの弟子丸泰仙師に代表で贈呈された。

デー・テン・チューWFB副会長が、心から感謝をこめて謝辞を行なったあと次期開催地がタイ国と発表された。

静かに降納される大会旗は、宮城泰年師・梶原 師に捧持され、中央壇上の大谷会長へ。会長より次期開催地のタイ仏教会のシー・オンシリ代表と、タイ仏教青年会のプリンチャー・チュニチャイ代表に手渡され、二年後の第十三回大会に期待をたくし、最後に藤沢実晃関西事務局長の閉会の辞をもって終了した。

### 東仏の観迎レセブ

シヨン ホテルオオクラ

大会第一日目の午後六時より、ホテルオオクラにおいて、東京都仏教連合会主催の観迎レセブシヨンが盛大に開催され、畑直孝師の司会で賑やかに開宴した。

神野真一師の閉会の辞につづいて、金子日威東仏会長が歓迎の辞、大谷光真全仏会長が挨拶、梶井大乗東仏理事長（大会実行委員長）の乾杯のあと、尺八や三番叟など日本古典芸能を堪能、あるいはフルーレ文化大臣（スリランカ）、望月日滋管長（日蓮宗）、山本杉理理事長（全日仏婦）などのスピーチがあり、海外代表団よりスタンレー・ウイリアム氏が謝辞を行なった。最後に都司博東仏事務局長が閉会の辞を述べ、散会した。

### タイ国王メッセージ

第十二回世界仏教徒会議の開催にあたり、お祝いのご挨拶を申し上げます。私は常に、世界仏教徒会議の主要な任務は、仏教の原理と修行の核心を探求し、それを人々に伝え、それによって人々が、より正しく日常生活を営むことができるようにすることであるという考えを明らかにしてまいりました。人々の心に仏教の正しい信念を植えつけることによって、日常生活の模範

的行動に反映させることであり、人々を引きつけ、正しい生活を築き、喜び、そして道徳を求め、理解させるよう導くための最善の方法であります。そうすることによって、皆様方は、人類が世界中に恒久的平和と幸福を確立する無限の試みにおいて、力強い救いの手をさしのべたとあがめられるでしょう。ご盛會を祈念いたします。

## 福田首相も出席

### 迎賓館で会長招宴

大都會のコンクリートジャングルの中に、緑と静寂さが残る白金・迎賓館。会長招宴はこの迎賓館の芝生庭園に、海外代表、福田首相など約二十名を感えるの来賓、国内参加者など十名を感える人々が招待されて、にぎやかに行なわれた。

招宴は六時三十分、国内参加者が拍手で迎える中を、それぞれ民族衣装の正装で出席、E・H・エリック氏の司会で

すめられるなど世界大会ならではの光景で、加藤海宴全仏総務局長の開宴の辞が始まり、まず大谷光真大会会長（全仏会長）が「仏陀が命をささげられた真に

気高い平和と調和の世界のための基盤をきずき、伝えていこう」と挨拶。つづいて福田首相が「仏陀の教えや、いつくしみの心が広まることを願っています」と挨拶され盛大な拍手をうけた。

大谷会長夫人の菓子方より、ブーンWFB会長へ花束が贈呈され、ブーン会長も満顔に笑みをうかべてこれにこたえるなど、和やかなすばらしい宴となり、梶内義雄、小坂善太郎、藤波孝生、原文兵衛四氏のスピーチのあと、スリランカ・フルーレ文化大臣の鏡開き、乾盃で最高潮に達した。

参加者は琴演奏、雅楽、もちつきなど日本の伝統芸能を楽しみながら、やきとり、すし、テンブラなどの模擬店で日本の味に舌鼓を打ち、お互いに歓談の花をさかせていた。

この間に、町田宗夫全仏理事長、杉谷義純WFBY実行委員長が挨拶、またエリック氏の軽妙な司会で海外代表が続々とスピーチして会場を沸かせ、大谷会長夫妻も参加センターをまわって終始笑顔で懇談され盛會をきわめ、定刻を少しすぎ龜山哲成全仏組織局長の閉宴の辞をもって散会した。

### 京府仏のサヨナラ

パーティー 京都国際会議場

サヨナラパーティーは、閉会式の終わった午後六時より、京都国際会議場サクラの間において、京都府仏教会の主催で開かれた。

パーティーは庭にまではみだすほどの超満員の盛況の中で、小林忍戒京都府仏理理事長の開会挨拶に始まり、山田無文妙心寺派管長（全仏副会長）の挨拶、林田ゆきお京都府知事のメッセージのあと、韓国仏教会よりブーンWFB会長、大谷全仏会長、桜井実行委員長にそれぞれ記念品が贈呈されるなど和やかな交歓風景がみられた。

伴義台京都府仏会長の乾盃につづいて山崎昭見竜谷大教授がルンビニ一開発等について挨拶、とび入りのスピーチが相次ぎ、久世六斎念仏など京都らしい芸能が賑やかに行なわれたが、閉宴に近づくとつれて、会場のあちらこちらで、お別れの握手がみられ別れを惜しんだ。



婦人大会で挨拶する山本理事長

### スリランカ大統領メッセージ

一九七八年十月一日から六日まで東京にて開催される第十二回世界仏教徒会議に来賓としてお招き下さいました全日本仏教会に対し、私の心からの感謝の気持ちをお伝え下さい。

スリランカと日本の関係は、多方面にわたりますます深まって来ておりますが特に仏教を通じて両国が緊密な友好関係を保っているという事は真に喜ばしいことであります。

## 婦人大会に

### 四百五十名

内外から参集

全日本仏教婦人連盟（全日仏婦）では第十二回世界仏教徒会議婦人部会と全日仏婦第二十五回大会を併せて、十月二日午前十一時より東京グラントホテルに、海外代表婦人八十名、国内来賓七十名、仏婦関係三百名の四百五十名が参集して開催された。

第一部の法要は、ホテル五階の法堂で行なわれ、一条智光副会長の導師のもと世界平和祈願法要を厳修。大谷智子会長が挨拶をされた。

第二部の交歓午餐会は三階校の間で開かれたが、思惑を上回る盛況でロビー

飢え、欲望、恐怖に苦悩する現代世界において、釈尊の偉大な教えを心にとどめておくことは、非常に重要なことでもあります。

まさに援助を必要としている人々を犠牲にして世界平和を齎す軍備拡大の問題について、この機会に述べておきましょう。

私は、幼少の頃からお釈迦様の教えに導かれてまいりました。私が国際

まで一杯。山本杉理理事長の挨拶も「世界の仏教婦人は手を結んでいきましょう」と熱気あるものであった。

前全日仏婦副会長・李万子夫人の乾杯で祝宴にはいり、スリランカ大使夫人、安藤義祐全仏次長、川田聖寛豊山派管長、立部瑞祐御室派管長の祝辞がつづくなかで、お互いに婦人同士の歓談が和やかに行なわれ、海を越えた仏教婦人の交歓親善がはたされた。

## WFBYの

### 日本大会

増上寺大講堂で

第三回世界仏教青年会議（WFBY）

日本大会は、WFBY大会にあわせ、快晴の十月一日午後三時より増上寺大講堂で

連合の特別軍備委員会において軍事兵器の製造を規制し、最終的には国際連合において完全非武装達成させる至上権を確立する必要性があり、軍備費は貧しい人々のために使われるべきだと私に提案させたのは、まさにこの教えなのです。

国務多忙のため第十二回総会に残念ながら出席することは出来ませんが、私はこの大会目標を支持致します。

心より御成功をお祈り申し上げます。

開催された。

開会式は、世界平和祈願法要（導師・平原隆秀全日仏青理事長）のあと、永倉嘉文実行副委員長の開会宣言ではじまり、杉谷義純実行委員長の挨拶と、WFBY・ブーン会長のメッセージが披露された。

四時からはWFBY総会が、平原理事長を議長に開かれ、活動報告等が行なわれた。

二日目はWFBY・ブロック会長が議長となつて総会が再開され、パンポット事務総長の活動報告のあと、役員改選が行なわれ、ブロック会長が再選、六人の副会長が選出された。

午後一時から「仏教青年は未来社会にいかにか貢献できるか」をテーマに、大会記念結果が開かれ、五百人以上の参加で大盛況であった。

まず「WFBYはどうかあるべきか」のシンポジウムでは青年僧の活発な意見

仏舍利塔内で読経する韓国代表



WFBYで講演する弟子丸師



が多く出された。

記念講演は、フランス禅センター代表の弟子丸泰仙師が「二十一世紀に向う仏教青年のビジョン」と題して、意識の転換を呼びかけた。

つづいて精神科医の斉藤茂太博士が、「現代人の心の病い」と題して、健康な精神と社会を結び、よりよき環境をつくるよう仏教青年に期待すると激励した。

このあと参加者は、白金・迎賓館で開かれた会長招宴に出席し歓談した。

### よみうりランドで…… 丘陵の秋を楽しむ

十月四日、海外代表たちは、忙がしい会議の合間に、多摩丘陵のよみうりランドで心ゆくまで楽しんだ。

秋晴れのこの日、よみうりランドを訪れた一行は、まず仏舍利塔でタイ国のプラタンマ・ディララジャ・マハムニ大僧正を導師に、スリランカ、インド、ネパール、タイなど南方比丘による記念法要を行い、つづいて台湾、次に韓国の僧による読経が行われた。

このあと秋盛りの広い園内を、小林与三次日本テレビ放送網社長、よみうりランド関根長三郎社長案内で散策、野外昼食会では、おでんやおにぎりに舌つづみをうった。

昼食後はモノレールにてランドを一周し、水族館見学、水中バレーを見物するなど童心にかえったような楽しみぶりで満喫しようすであった。

### 記念講演会に八百名

読売ホールで開く

本大会を記念して開催された講演会は読売ホールに八百名を集め、山田一真記念事業部長の司会で始まり、まず加藤海晃全仏総務局長が開会の挨拶をし、本大会の概要と記念講演会の意義を述べた。

講演は、まず米国仏教団開教総長・辻頭隆先生が「アメリカ仏教の未来」と題し、現状をふまえて熱弁をふるわれた。

次に、真如会主幹・紀野一義先生より「風は野を渡る」と題して、仏教をわかりやすく講演された。

最後に趣味の雑誌「酒」の編集長・佐々木久子女史が「いのちとこころ」と題し、ユーモアをまじえて語りかけ好評であった。

### WFB大会を終えて

二十一世紀における仏陀のメッセージをテーマに、世界各国のセンターから、三六〇余名の参加をえて、無事に第十二回世界仏教徒会議日本大会を盛会に、また、交流にと意義ある成果をおさめて終了したことは、準備に当たってきた、全日本仏教会加盟の諸宗派・加盟団体・実行委員のみならず共に喜び申し上げた。

南方・東方・ヨーロッパ・米大陸と仏教の歴史に違いがあり、各々の立場の

なお、この講演会は仏教伝道協会、大本山西園寺の協賛、日本青年会議所宗教部会の協力をいただいた。

### 涅槃会

十一月聲明公演(小劇場)

10日(金) 遺教会 (6時半)

11日(土) 涅槃会 (2時)

出演 眞言宗智山派

前売 10月13日 二、二〇〇円

国立劇場

大会実行委員長 桜井大乗

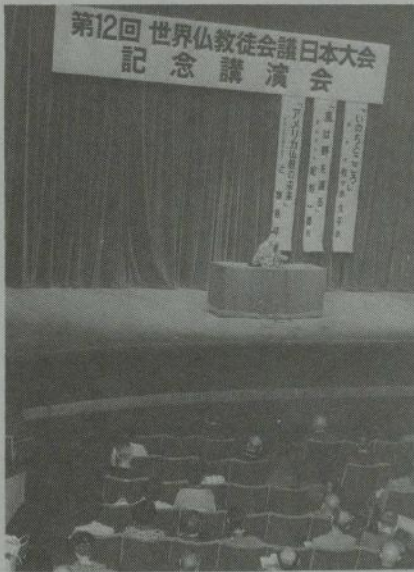
異なりがあっても一堂に会して話し合いを行なうことは今後ますます必要になってくることであろう、このような時期に日本において開催されたことの意義を思い直し、WFB常任理事国としての日本の立場をより鮮明にして、本部の機構の強化・運営にとたずさわって行かなければならないのではないか。

多くの海外からの代表が満足して帰っていった様子を見て、今日までの労苦を養やる思いであった。

▶深夜一時まで続いた  
レジストレーション風景



# WF B大会 カメラルポ



◀記念講演会で講演する佐々木久子女史



▶開会式で挨拶される大谷光貞大会会長

▶会長招宴で鏡開きの  
“サケ”を乾杯する  
各国代表





▲次期開催国のタイ代表へ大会旗を手渡す大谷会長



▲世界平和祈願法要へ出席し、増上寺大  
で合掌するダライ・ラマ親下

▼会長招宴の会場でブーン会長と挨拶する福田首相



▶帰国の挨拶をされるブーン会長



# テーマ 近代諸思潮と仏教的思考

## 第一分科会

問題提起者井上講師の提言のあと、討論に入り、まず提言でのべられたヒューマニズム、啓蒙精神についてスリランカ代表より疑問が出された。ヒューマニズムも啓蒙精神も、既に釈尊の教えの中に見られるものであるから、特に近代にヒューマニズムが起ったなどと言わな



執弁をふるうフランス代表

もよいという、仏教徒の立場からの発言であり、同じような見解が二、三示された。

テーマの理解が徹底していないのでないかと発言があり、そこで参加各国の代表オプサーバーが、各自が理解している「仏教とは何か」を開陳することになった。

仏教的思考とは正しいものの見方・智慧である（ホンコン代表）という理解・また心を静かにみつめる禅である（フランス代表）とか、無我無心の境地によって憎悪敵対を除くことができる（スイス代表）というみかた、また哲学である（ネパール代表）と理解されている。これらの見解は仏教を自我エゴを克服するためのもの、内心の問題を解くものとみている。

これに対し、スリランカ・マレーシア・シンガポールなどの代表の発言は、各国の事情が多民族宗教であり、その上仏教内に分派がある現実を認めた上で、異なる宗教・宗派が相互理解する場を設け、更に実践面でも連携し協力しあう方向に向っていると報告し、自己と他者が

ら起る問題を切実に訴えた。仏陀の教えは一つであり、マハーヤーナ、テーラヴァーダの別なく同じ仏教徒として未来に向って歩もうと提唱した。

次に仏教は社会に対してどう動きかけるか、未来に向けて何をなしようかという点については、菩薩道の実践であるという発言が多く、一致した答えとなった。シカゴ代表は平等即差別生死即涅槃の「即」の意義をくみとり、具体的に国家と市民を例にして、国家即市民、市民即国家ととらえた上で、国家に何をなしようか、何を貢献できるかを考える時、その方便は菩薩道の実践に他ならないと主張した。

菩薩のあり方として自己をほりさげ、自心を探求する一面と、社会に目をむけて社会の人々と共に生きる利他の一面とがあること詳細に論議された。

またスリランカ代表は、教育という面から生涯教育の必要を説き、人の心の中に和をきづき、個々の人々が慈悲の心を有しそれが多数に及ぶことが即、仏教徒として社会にかかわる姿勢であるとした。科学で病氣は治せたが豊かさから起る病いは治っていないと現状の問題を指摘した。

現代の我々が当面している人口問題、資源の問題、核兵器、環境破壊などの諸

問題について、未来を展望する上で仏教徒自身に問題意識、危機感はあるのか、仏教はどうとらえようかか論ぜられた。シンガポール代表は核兵器の危機より救うものは人間の精神の向上のみであると、これについては各国各宗教が立場の相違をのりこえて協力しあうべきだと主張した。又人類の敵は今や核兵器よりも人そのもの、心のあり方であると改めて心の問題がとりあげられた。

最後に、科学・技術の発展に対して仏教徒は何を果さねばならないかの提起がされた。現実に人類は科学・技術のすさまじい発展によって、利益をうけてもいるが、また逆に害も受けている。害をもたらすものは何かと言えは、科学・技術を取り扱う人間の心にあるのであろう。事実、人間は無限の欲望に対しその自制心を見失ってきている。もはや、人間を物質にみだて科学・技術的に遺伝子管ベビーさえも生まれているのもその一例である。核の融合問題も然り、こうした点で科学者自身の方が問われている。現代のエゴイズムの問題に対する超克は、欲望の原点と自される自我を自己自身の立場のみたって主観的にとらえるのではなく、客観的にとらえてくることにある。それが仏陀の説かれた「無我」の大精神である。よって科学・技術を取り扱う人間の問題こそ、21世紀に向って人類の存亡にかかるといえる重大な問題であり、そこに仏教徒は思いを及ぼさなければならぬ。

なお各国各宗派の代表が民族国家宗派の違いをのりこえて連帯し協力して、仏

教の名のもとに釈尊の歩んだ道を歩もうという提言が多かったことを改めて指摘

し、この会議が有意義であったことを記しておきたい。

める相互理解への道を採りつつ interreligious な問題を指向すべきであるとの基本認識の必要性が求められた。

また、伝統仏教への批判により、二十一世紀への仏教のあり方を探る方向性に対し、佐伯講師より創造的破壊が unitarian universalist になる懸念が表明

## 第二分科会

# テーマ アジアの現状と仏教徒の使命

藤吉講師より、自由主義と社会主義の対立抗争をアジアの現状認識の基礎に据え、 interreligious な問題が世界的課題となつていゝるなかで、新たな共同体実現に向い仏教の反省と対応を求めるといふ趣旨のもとに、次の六項目の提起がさ

れた。①人類共同体実現のために仏教者はどのような自己批判をなすべきか。②各宗のドグマをどのように再編すべきか。③現在どのような改革運動がなされているか。またその評価について。④社会主義国の仏教徒との提携の問題。⑤個人の解脱と全人類の救済について。⑥人類仏教の構想。

一調和の探求の面から、さらなる検討が必要であるとされた。また別の日本オプサーバーからは科学技術の行き過ぎに歯止めがかけられるべく、特に戦争要因(軍備拡張・核兵器使用 etc)への宗教者の反対運動を展開することが訴えられ、モングル代表もその必要性を強調した。

③の提起に対する各国の現状の紹介が求められ、ベトナム代表は、インドシナにおける社会主義政権誕生以来の仏教活動の窮状を訴え、仏教徒の使命にもとづく理解が求められた。ハワイ代表からは、各宗教間の相互理解より、仏教内の宗派間の理解が、遅れている事実を顧みて、Buddhist Information Center のような機関の設置の必要性が報告された。ネパール代表からは、マハーヤーナ、ヴァジュラヤーナ・ラマ教等が平和共存している現状はセンターの設置に負うところがないとの現状紹介があった。これに対し藤吉講師から民衆生活の近代化と平和共存の可能性に対し、現時の仏教が果たしてその責を果しうるや否やについての反省が強く求められた。



白熱の討議がさした第一分科会

①に関して、民族主義とテラウアーダ、国家主義とマハーヤーナの結びつきの克服が提案された。まずネパール代表はの大乗、テラウアーダ等の差を超えて、まず『仏教徒』であることの自覚が肝要であるとし、②世界仏教への貢献の条件として仏教センターを建設、③仏教の根本原則に従いつつ相互批判を止め、相互理解をすすめる。④簡単なことばへの聖典の翻訳、⑤諸活動には宗教的寛容が必須といった具体性を伴う意見が出された。

この原点への模索についてネパール代表は釈尊、カニシカ王時代、密教の立場等の歴史を踏まえて、一つの仏教徒としての結びつきの必要性が訴えられた。前田講師からは平等の理念の強調は各宗派の特殊性の無視となる嫌いがあり、そこから具体的な実現の展望は得られないとの指摘がなされた。従って特殊性を認

められた。また日本のオプサーバーより、仏教徒の団結の必要条件として、仏暦の制定が強く訴えられた。しかしこれには仏誕年決定の問題があり、さらに人類全体の統

ネパール代表は宗教的寛容の必要性を強調した。シンガポール代表からは、マハーヤーナ、テラウアーダの僧伽の連帯、

各宗教が集合しておこなう合一会議体の実状が紹介された。モンゴル代表からは社会主義体制の下で憲法に保証された宗教活動の自由に基づく仏教徒の年間行事が紹介され、相互に独立した仏教諸派が基本的に共通な要素を強調し、連帯している実情も紹介された。

これらの実情をふまえて、社会主義国仏教徒の提携問題と、⑤⑥の提起に対する質疑へ移った。スリランカ代表から宗教教育を中心とした実例紹介に基づく社会主義的政策への宗教の関係、動らぎかけが示され、更に、中道精神にのっとり、左右の枠を越えて人類生存の危機に立ち向う必要性と、統治国家における慈悲の精神の発揚とが訴えられた。台湾代表は、仏教の国家超越性に逆対応して、政治が仏教に関与する現実の認識、弾圧された仏教徒への援助の要請がなされその実行にWFBの存在意識が問われた。インド代表からは中道の必要と共に、社会正義の実現の過程での現実的妥協も主張された。モンゴル代表は非宗教的勢力とも協力して、平和と正義の戦いに仏教も参加する中で、自国政府に影響力をもつという現実的方法が示された。

更に、⑤の提起について地球的規模で政治的文化的側面を考慮しての討議が要請された。スリランカ代表は、伝統的仏教は個人の悟りに重点を置いたが、本来的には全人類の悟りが目標であったとの認識に立ち、全人類の福祉を目指して、仏教が哲学的、社会学的アプローチによって統合される必要性が訴えられた。具

体的には、窮状にある仏教徒への連帯・援助、社会的仏教の役割の自覚・協力・理解の前提となる各国語の理解の推進が提示された。

⑥の提起において、摩訶講師は、国家対立の危機を克服するための仏教の貢献の可能性を考慮して、仏教の原則論から国家存在の意義を問うことを主張した。

## テーマ 二十一世紀の僧伽形成

### 第三分科会



明日の僧伽を討議する第三分科会

そして、民族主義・国家主義を超えた人類仏教への動きこそが、人類福祉の阻害要因である国家存続の現実を克服し得るのではないかと提起した。この提起に対し、スリランカ代表が民族主義国家制度の存続を不可避なものと予測しつつ、過去の文化の継承に基く社会への仏教の関与を推進すべきであると主張したにとど

まり、国家と宗教の関係への根本的討論はなし得なかった。しかし、各国代表が一堂に会して、それぞれがかかえている問題や状況を知りえたことは、相互に資するところ多く、「中道精神」に基づいた全人類の福祉を常に志向すべきことを確認しあったことが一つの成果といえよう。

#### ①サンガの定義についての論議

提案者西義雄講師が、阿含に基づいたサンガ(僧伽 sangha)の理論的背景を述べられたのち、平川先生が基本的には西講師の提言に賛成、南方上座部の比丘僧伽と大乘仏教圏の四衆僧伽が、より一層の相互理解に努力すべきであろうとの提言があり、これを受けて、スリランカのソラタ師が、スッタタ・ピタカによって上座部の僧伽に対する基本的見解を説明され、上座部と大乘仏教のサンガとは形は違わうが、教理・信仰についてはほとんど同じであると述べた。釈尊の創設したサンガの理念は、仏教のバックボーンであるから、仏教の教団である限りいずれの国の教団でも、原始仏教のサンガの理念に立帰って、自己を確認することが必要であるとの論議がなされた。

#### ②各国におけるサンガの実状とその問題

次に、各国の代表が、それぞれの国における教団の実状と、直面する問題を述べた。例えば、マレーシアにおいては、中国人、タイ人、スリランカ人等の間に仏教信仰はあるが、マレーシア人でなければ出家できず、比丘の数を確保することがむずかしく、従って教団の指導者を得られない悩みがある。又タイでは、一般の信者が仏教を理解する為の易しい仏教の入門書を得たいと述べ、又仏教徒はすべからず仏教僧を用いるべきだという意見が主張された。その他、ヨーロッパにおける仏教教団のもち方の困難さ、ブラジルの代表からは、他宗教や複雑な人種構成の中で布教の困難さと、指導者の養成についての問題が出された。また仏教伝道の前衛とも考えられるアメリカの地における教団のあり方について有益な示唆が与えられた。

又韓国の代表は、これからの教団は、出家在家が一致協力しなければ発展はあり得ない。今までは、余りに出家本位で

布教していたがこれからは、在家の伝道師を育成しなければならぬ。その線に沿って自分の教団は実践していくという力強い意見も出された。

④ 未来のサンガのあり方について

これら、各国の教団の事情をふまえて、最後に、この分科会のテーマである「未来の僧伽の形成」について問題が煮詰められた。平川先生はまず、サンガについて、南方の比丘サンガは「信者から礼拝されるサンガ」でありこれは二十一世紀に向っても存続すべき尊いサンガであると述べ、これに対して大乘仏教の教団は、「仏陀を礼拝する同信の集り」と考えられ、そこでは出家も在家も平等であ



満堂となったパネルディスカッション

る。しかし、工業化社会になり、高学歴者が多くなると相対的に比丘サンガの価値が下ってくる。従って信者の立場を重視しないとサンガの将来の発展はむずかしい。日本では、僧籍にある人々の集りを教団というが、在家でも教人が集って仏教実践の場をすれば、それをサンガと称してもよい。それは又、無私の立場に立つ「奉仕の団体」であり、仏教の教理と理想を実現するために努力し実践する信仰者の集団を、サンガと考えることが出来る。将来、アメリカ、南米、ヨ

メイン「仏教徒の思考する未来社会像」にそって

パネルディスカッション

各講師紹介のあと、武藤議長より「本大会におけるパネルディスカッションが大会史上初のユニークな形式であり、大会会議の総決算としてなされるものである」という意義が説明され、つけ加えて大会の趣旨であり、同時に世界の希求するところである「今、我々は何をなすべきか、智慧の宗教とよばれる仏教は何を果し得るか」を考える為、二日間にわたる議論が、中村先生の基調講演を基にして如何様に展開したかの報告を求め、以下、三分科会の報告が次のように行なわれた。

ヨーロッパに伝わっていくサンガであるならばこの新しいサンガの理念が要求されるであろうと将来の展望を示された。

続いて雲井先生は世界の国々で事情は違いますが、仏陀の教えを受けたという共通の地盤を確立し、そこから二十一世紀の僧伽形成ということを探求することが大切である。夫々の国のサンガの事情によって政治、経済、社会、文化に対するかわり合いに浅深はあるが、「世のため、人のため、利益のためにこの道を歩め」という仏陀の伝道宣言の共通の地盤

に立ち帰り、自己を問い正しながらサンガのあり方を模索してゆく指導者の自覚が必要であると強調された。

今日の複合的社会の中へどのような形で仏教徒は対応していくか。しかも今や地球というかけがえのない運命共同体の中で現代の諸問題、殊に、他の宗教との対話が求められ、政治、科学、教育、人口問題等に広い視野をもって対処していくことが要求されるであろうと述べられた。

第一分科会は、三枝パネリストの報告

によれば、井上智勇先生の問題提起は、「近代諸思潮と仏教的思考」の題にそって、近代諸思想がルネッサンス以来、世界に及んでいるが、その根本には危機意識があり、それは科学技術、精神の両者に深く浸透し、近代ヒューマニズムが生み出したところの民族、階級、国家の自然主義はエゴイズムとして結晶している。近代のエゴイズムが生み出した現代危機を克服するには、仏教は如何なる動きを持つべきか、ということにあった。

これに対して、アジア、スリランカな

どの各国の人々から反論を含めた活発な意見が出されたが、その中で伝統的国にあっては具体的問題がとり上げられ、それらは近代思潮の定義はそれでよいとしても、仏教的思考は多様なものであり、凝集する「即ち」を唱えつつ、融和の中に多様な価値を見出すところに仏法があるのであるから、多様性を仏教の真髄であるとする意見があった。これに対して近時伝播したアメリカ、ヨーロッパの人は仏教に対する把握の仕方が哲学的傾向をもっているようであった。

また、現在迄の分析だけでなく、未来についてもどう対処しようとするかという問題が出されたが、井上先生は、菩薩の立場から、慈悲行として自己をみつめこれ迄以上に自然科学者に協力し、自他

昭和53年11月1日

を活かしていかねばならないと発言があった。しかし、近代的思考と仏教的思考がどうかかわり、どう対処するかの問題にあつては、充分に議論する迄はいたらなかつたように思われる、とされた。

第二分科会については、斎藤パネリストから報告があつた。藤吉慈海先生は、「アジアの現状と仏教徒の使命」の論題のもとに、六点の問題提起をされたが、論議は、仏教徒は一つであり、アジア仏教センターを設けて仏教振興と研究を果すべきこと、また、仏教層を設けるべきであるが、より求むべきは人類層であるとする意見。或いは、各国仏教の現状報告をふまえた議論などがあつた。その間、仏教徒の団結が終始強調されてはいたものの、それぞれ結論が出されなかつたのは、多様性の中の統一性を模索したからにはかならない。また、アジアの現状分析が流動的であるにもかかわらず、それを自明のこととして、直ちに仏教の問題に入つた為、改革運動の具体策を打ち出すに至らなかつたし、政治と宗教の問題についての議論は不充分であつた。

第三分科会については、雲井パネリストから報告があつたが、西義雄先生によつて「二十一世紀の僧伽形成」は、①三寶に対する仏教的解釈、②仏教徒は同じ信仰をもっているという立場から僧伽形成が可能である、との二点を中心として議論が展開された。僧伽の定義について議論がなされ、上座部系、大衆部系僧伽の相違を超えて僧伽が形成され得るかという点について、また将来の具体的方策

として、マレーシア代表から、仏教の根本書籍が作製されるべきであるとする意見があり、また全仏教的リーダーが欲しいとする論議などもあつた。しかし乍ら仏教者が将来において連命共同体として諸事に対処する為、ぜひ僧伽形成を模索せねばならぬとする意向が終始基底を流れ、総合的僧伽と個別的僧伽のあり方の可能性が議論された。特に、アメリカ代表からは、僧伽の在り方のモデルとして、ファミリーの構成を参考にしようかとの意見が出された。

総して、積弊に帰れとする立場を常に念頭におきつつ、社会への対応を考えねばならぬが、異なる状況の人々が同一の席につき、僧伽について相互の意見を開陳したことは意義深かつた。しかし、具体的対応策は今後に残されたといえよう、とされた。

この後、パネリスト相互の質問に入り三枝パネリストから「多様性について、現在、宗派相互の理解は進んで来たが、平和共存ではなく真の共存が可能かどうか、宗派の絶対性を前にして相互理解は多様なものになるといつてよいか」との質問が出、斎藤パネリストは、それに答えて「第二分科会では、普遍性と特殊性の問題として議論された。各宗派は、その宗祖の教義の発展性の帰結として他宗派を尊重し、それらの根本をおさえつつ超宗派的普遍性を見出すべきだ」と論じられた。それと共に「仏教はアジア諸宗教の中でどう対処し得るか。強く自己の立場を強調すると宗教を超えた人間の共

存さえも危くなる。相互理解を深めつつ発展しなければならぬ。そこにおいて寛容の精神に基づき仏教は、その役割を充分に果し得る」とされた。

これを承けて、雲井パネリストが、「相互依存は寛容の精神の問題があつた。従つて、多様性は問題として底辺に流れていた。第一分科会においては科学と宗教の問題は出たか」と問い、三枝パネリストが「出なかつた。近代思潮の科学に対する宗教の側の問題提起はなく、仏教者が科学に対して充分に考えているかどうかあやしい」との意見が出された。

また、斎藤パネリストから「仏教を中心とするアジア諸国において、西洋思想に対する対応の仕方は緩やかである。仏教の中から、西欧近代思潮への批判はどういう形で出ているか」と質問があり、三枝パネリストは、「井上先生はエゴイズムに至る自我の流れの中で説明されたが、西欧の危機意識とそれへの外部からの批判は軽々しくなすべきではない」と答えた。

ついで、会場から活発な質問が出されたが、終了時間が切迫している為、議長はそれらをまとめて、①宗教的内面からみて、日本には僧伽があるか。あるとしたら現状はそれでよいか。②当面する外面的大問題であるマルクス・エンゲルス主義に仏教はどう対処するか、の二点とし、金岡副議長に発言を求めた。

金岡副議長は「多様性の中で統一を見出すべきであり、昨日の問題は、宗派、民族、国家の多様性の中で、仏教という

核を如何に普遍的に生かすかの問題である」と捉え、「今後議論が如何に複雑化しようとも、方策は別として、本当の意味の対話は急な議論を慎みつつ次の機会を待ち、継続的に成果をつみ上げてゆかねばならぬ」と総括された。

また、真溪副議長は「今日の自然科学の発展は、その底に零の発見や空観など仏教思想に負うところが極めて大きかつた。それは、精神性が科学を支えていたからにはかならない。今日、科学は技術的に進歩したかもしれないが、真の発展とはいえない。全人類に資する未来の科学を形成するためには、科学を哲学的に体系化せねばならぬし、そうする事こそ仏教に今日課せられた任務であり、二十一世紀の生成原理として仏教があるのだ」と結ばれた。

最後に議長は、議論は充分意を尽くし得なかつたが、将来、この理想的僧伽は必ずや形成されるであろう事を希望すると述べて、一時間半にわたるパネルディスカッションをおえた。

## 第十二回WFB大会 記録フィルム放映ノ

日本テレビの「宗教の時間」に、今大会の様子が放映されます。

11月12日

午前6時30分〜45分

11月19日

# 12th WFB がらく きく

### ◆土産品(其一)

開会式で海外代表より大谷会長へ土産品が贈呈されるなか、ブラジル代表が三人がかりで大きな「蝶の額」を持参。大きさは九〇×一七〇という大きなもの、重かったでしょう。

### ◆土産品(其二)

その贈呈のとき、インドのRセンター代表が泣きそうな顔で司会者のところへきて「土産品をホテルに忘れてきてしまった。お願いだからアナウンスだけしてほしい!!」と。すぐあせてきました。

### ◆土産品(其三)

その三は、タイのバクナム大僧正。やおら比丘団の席を立てて大谷会長の方へ



新幹線の中でも歩きまわるアマリタ・ナンダ師

歩みより、サッと黄衣の下から仏像を取り出して贈呈。趣味は手品かも。

### ◆アノ無理難題師

第一回大会より連続参加のアメリタナンダ師(ネパール)は、日に三度は事務局に顔を出している。いろいろ質問やら注文をしていく。ときには無理な注文も出てくるので、アノムリナンダイ(無理難題)さんが来たとすっかり有名な。

### ◆スイスのおおはちゃん

今大会の最大のスターはスイスのおおはちゃんことセリーヌ女士(事務局談)だそう。特に「話題」となったのは仏英研(コンパニオン)の人達がことごとく英語の発音を直されたことで、鎌田部長が「俺もだよ」には一回アッハッハ。さらにジョンソンさん(米国)も「ワタシもシカラレマシタ」には事務局は大笑い。

### ◆疾風のごとく...

WFBYのブロック会長は、タイ国商務副大臣というお忙しい立場にあるだけに、一日の開会式後に到着し、Y大会が終わるとサッと帰国。疾風のごとく現われて疾風のごとく去って行く、まるで月光

仮面だとは仏青の声。

### ◆ジュゲムジュゲム

落語のジュゲムは長い名前前で有名な話したが、チャンダナンダ大僧正はジュゲムのWFB版。正式に紹介するには、ヒズ・ホーリネス・ザ・モースト・ベネラブル・パリパナ・ダルマキールティ・スリ・グナラタナ・チャンダナンダ・マハナヤカ・テロ・オブ・ザ・アスギリヤ...とつづく。司会者泣かせでした。

### ◆川上哲治氏

WFB本部相談役のチャロム・ウイスモル氏は写真でも「オヤ」とおもうほど赤パットの川上さん(前巨人監督)に似ている。タイ陸軍中將という敬しい人であるが、終始にこやかでみんなに好かれていた。



オヤ、川上さん

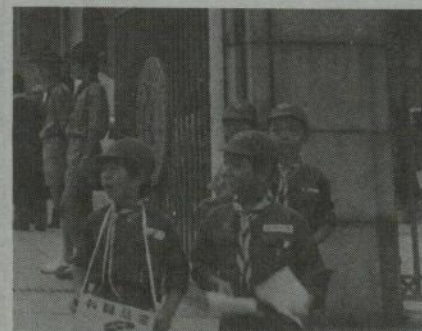
### ◆赤い羽根募金

開会式にお手伝いいただいたボーイスカウトの子供たち、十月一日なので築地本願寺門前で赤い羽根の募金。成果はどうだったかなあ。

### ◆チームワーク

海外四十八センターの代表が参加したが、特に目について行儀のよいのが台湾仏教会の人々。どの会場でも集合といえ

ばサッと集まり、写真のように旗をもって集団行動。逆にバラバラなのが某国の一センター、偽者がいたりしてそれは大変だった。(登録班談)



赤い羽根募金にご協力下さい

堂々の入場です



### 東寺真言宗が加盟

九月二十九日、東京グランドホテルに  
おいて開かれた全仏・常務理事会で、か  
ねてより加盟申請のなされていた東寺真  
言宗の加盟が承認された。

— 東寺真言宗の概要 —

総本山 教王護国寺  
宗務庁 東寺真言宗宗務庁

(京都市南区九条町一番地)

包括寺院数 一五二カ寺

宗務総長 木田有岳

### — おことわり —

世界仏教徒会議日本大会の開催のため  
十・十一月合併号といたしました。写真  
も多くいたしましたので、大会の様子が  
おわかりいただけることかと存じます。  
種々御協力いただきましたことにあり  
がとつございました。

なお、WFB総会、常設委員会や地方  
大会などにつきましては、次号に掲載い  
たしますのでご許容下さい。

## WFB日本

## 大会へ寄金

【築地本願寺】

- 参万円 真柄信雄、福島正次
- 貳万円 山本嘉平次
- 壹万円 花房信重、倉沢豊丸、井上幸成、  
森信、K・K・モリヒュー、皆  
川一郎、中沢次郎吉、川辺秀、  
杉浦沢司、奥沢竜助、南川晃昭、  
石部八重

拾万円 和田竜宏、三浦正吉

### 事務総局録事(九・十月)

- (九月)
- 二日 理事会  
  県仏代表者会議
- 七日 局内会議

八日 国際専門委員会

十四日 局内会議

十八日 孝道山大統領本葬

二十一日 局内会議

二十八日 局内会議

二十九日 常務理事会

(十月)

一日 常務理事会

十六日 局内会議

二十五日 局内会議

二十七日 抱括宗教法人研究協議会

### WFB事務総局録事(九・十月)

(九月)

二日 実行委員会

四日 WFBY打ち合せ

七日 局内会議

八日 長岡市仏来局

九日 四国・鳴門大会打ち合せ  
埼玉・川越大会打ち合せ

十一日 広報委員会

仏教英語研究会

十二日 総務委員会

十三日 式典(閉会式)リハーサル

十四日 式典(開会式)リハーサル

局内会議

十六日 会議(講師など)打ち合せ

十八日 接待委員会

十九日 渉外委員会

式典(国立劇場)打ち合せ

式典(増上寺)打ち合せ

記念事業委員会

二十一日 局内会議

二十五日 事務局会議

二十七日 事務局移動

日本代表団打ち合せ

担当委員会

二十八日 局内会議

式典(国立劇場)打ち合せ

二十九日 代表団登録

最終打ち合せ(実行委員会)

三十日 WFB総会

各会場設営

(十月)

一日~六日 WFB日本大会

七日~十二日 地方大会

十六日 局内会議

二十五日 局内会議

## 寺院用具

浅草通り五鳳会加盟店

株式会社 決田商店

東京都台東区寿2-10-9 (地下鉄田原町駅前)

電話 代表 (841) 4965

## (財)全日本仏教会

第十二回世界仏教徒会議日本大会の  
開催にあたり、ご協力いただきまし  
たこと、厚く御礼申し上げます。

昭和五十三年十一月一日発行  
十・十一月合併号第二四三号

発行人 鱒湖正浩  
編集人 安本利正

発行所 財団法人

全日本仏教会

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五(東京本願寺内)  
電話 〇三(八四三) 六三四一(三)